

西淀川記憶あつめ隊

Vol.22



山本 一 一 さん

山本さんは神戸生まれの88歳。「まちづくり」ということばが一般的になる前から、西淀川の街づくりに尽力してきました。

2017年9月7日
聞き取り

◆結核を患い西淀川へ

山本さんは、戦後すぐに大阪の浪速区の革ベルトを創る中小工場に勤めていましたが、結核の治療のために西淀病院に入院します。足掛け5年という長い治療生活でしたが、そこで看護師の哲子さんと出会い、結婚。仕事も、治療に当たった林喜彦医師からの勧めがあって、病院に就職することになりました。

病院の仕事は「西淀健康を守る会」の仕事でした。地域の人たちと病院を結びつけるための活動でした。

◆まちの『なんでも屋』

健康を守る会の活動について聞いたところ、「何でもやる」と言われてしまいました。「街の問題、生活の問題、ゴミの問題、どぶが詰まったとか、自分も職員たちもなんでも屋だと思っていた」と、当時を振り返ります。「当時の西淀川の環境は、雨が降ったら水浸しになって、環境がよくなかった」けれど、そこで解決できる問題は「地域の人と話し合って、要求の種を固めることをやった」とのこと。大変な『なんでも屋』さんですが、「現場に入ることが好き」だから続けられたそうです。周辺は、当時がま島といっていたが、少しの雨でも浸水するためにバス通りに下水道管を入

れてもらい解決したとのこと。今の西淀川の様子とは全然違うことがうかがえます。

◆第二室戸台風の被害者

1961年の第二室戸台風では、千舟大橋をわたったところの堤防の下に住んでいたこともあり、被害を受けたそうです。「台風は昼過ぎに大阪を通過したが、自分は病院にいたので朝からベッド移動などをやったり。一段落して昼休みに家に帰ると御幣島はどうもないのに大和田が水に浸かっていた。台風はすぎたから水は引くと思っていた。しかし水が増える一方で阪神電車の軌道を超え、泥水は2号線の国道電車の一番高い線路を越えた。急ぎ病院に戻り職員に足止めを伝えた。夕方には御幣島全体が冠水した。古河鉱業の堤防の決壊が原因だった。西淀川は地盤沈下で、1〜2m下がっていたため、出来島・大和田等は着のみ着のまま避難した。大和田小学校へ6千人、淀中へ3千人避難した。いろんな地域が孤立し西淀病

院も孤立した」とのこと。水は2週間もひかず、筏を作って移動するなど、大変な状況のなか、困難を潜り抜けたそうです。

◆被害者の救済

堤防の決壊の責任を求めて、被害者をまとめて、古河鉱業に抗議しました。東京の本社にも掛け合って、裁判にまで発展し、和解の道を選びました。古河鉱業からは見舞金として町会を



通じて二億円を超えるお金が入ることになり「地域の人々に還元してくれらんだったら、和解してもいいという立場だった」と語る山本さんの姿勢に、西淀川の公害裁判の源流を見ている気持ちになりました。●林